

漕艇部部歌

— 春三月の（茨戸の歌） —

（昭和三十年）

木原慎一君 作歌・作曲

一

春三月の蝦夷島

長き眠りにとぎされし

茨戸河畔の雪とけて

とく待ちわびし水の子の

喜び笑ふ声すなり

二

岸の辺近く郭公の

啼く音うれしく聞き初めね

漕ぎ来し方を眺むれば

霞にとける野の煙

水郷の春の昼閑か

三

岩燕は去りて風熱き

夏たけなはの候となる

運河一発引き抜きて

しばし憩はむ土手の上

羊も寄りて草を食む

四

いつか炎暑の日はゆきて

光のどけき茨戸河

青き水の面に波立たず

こよなき季節訪れぬ

心ゆくまで漕がむかな

五

手稲は紅く空高く

秋の気深くなりにけり

かい先近くぼらはねて

夕練習終へるころ

陽はくれないに没したり

六

河霧深くたちこめて

霜結ぶ朝艇出す

みぎわの木々は枯れはてて

冬もま近となりぬれば

惜しみて漕がむ残る日々

七

北風ささび雪は舞ひ

ふぶきに暮れる冬の河

今日ぞわれらが漕ぎ納め

いざわが友が胸深く

また来む年の幸思へ